
降り積もる梅雨

露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降り積もる梅雨

【Nコード】

N6632T

【作者名】

露

【あらすじ】

記憶喪失の少年と誰かを探している少女。

思いがけない出会いとは新たに起きた事件の前兆だった。

このお話はポケットモンスターBWから3年後という設定で進んでいます。正直なところ勝手な都合が多すぎると思います。

因みに、これは作者の初投稿の作品となっております。読みづらい部分もあると思いますが、ご了承ください。

嵐の夜中（前書き）

初投稿となります。

嵐の夜中

「くっ……………！」

ある激しい嵐の夜。雨は強く、雷も鳴るとある森の中で少年は走っていた。相当息をきらしながら。

そんな少年を追い、青年が走る。殆ど全力疾走のように見えるが笑っているところを見るとまだ余裕のようであった。

「フツ……………、逃がさん」

青年はモンスターボールを手にとって走る少年の前にポケモンを出した。

しかし、出されたポケモンは普通と違う雰囲気が出ていた。機械の如く冷たいように見え、目は何を見てるのか分からない。正気を失っている……………、その言葉がぴったりであった。

「フローゼル、やれ！」

少年の目の前に現れたポケモン、フローゼルは青年の言葉を聞くと体に水を纏い、彼に向かって素早く突進してきた。

少年は素早く体を動かし、その攻撃を避ける。

「くそっ、イーブイ！」

少年もボールからポケモンを出す。フローゼルよりいくらか小型で

可愛らしい容姿のポケモン、イーブイはフローゼルに向かって突進していく。フローゼルはそれに気づき素早くその場から離れる。イーブイも急ブレーキをかけ、フローゼルと対峙する。

「全くもって愚かな奴だ。フローゼル、ハイドロポンプ！」

青年の言葉を聞くとフローゼルは口から大砲の如く水をイーブイに向けて発射する。しかし、イーブイはそれに当たると同時に吹っ飛ばことなく、霧のようにその姿を消した。

「何！？」

「今だ！ 行け！！」

少年は不意をつかれた青年の一瞬の隙を見逃さなかった。彼はどこにいるのか分からない自分のポケモンに指示を出した。それと同時にフローゼルの足下が少し崩れ、そこからイーブイが現れた。イーブイは穴から出てくる勢いを利用してフローゼルの体制を崩す。そのままフローゼルを目で捉え、逃がさなかった。

「シャドーボール！」

イーブイは待つてました、いわんばかりにすぐに口元に黒いエネルギーの球体を作り、それを発射した。それはフローゼルに当たった。フローゼルはそのまま瀕死、つまり、戦闘不能となった。

「フッ、やはりな……。これは素晴らしい！」

青年は不敵な笑みを浮かべ、続けて言う。

「やはりお前は私達に必要なようだ。」

少年は後ずさりしつつも辺り一帯に響くように言った。

「ふざけるな！ 誰がお前達のような奴等のところに戻るか！ 生き物を、研究と言う名で弄ぶ、そんなところはもうごめんだ！！」

少年は意識が朦朧としてきたのか、だいぶんらついていた。

しかし次の瞬間、稲光がその辺り一帯に強く広がった。

光が消えたときにはもう既に少年の姿は見えなかった。

「チツ、どこへ消えた……………」

青年はその場から姿を消した。

嵐の夜中（後書き）

どうも、初めまして！ 露と言います。

初心者で下手くそですが、これからよろしくお願いします。

では、よろしければ、感想をお願いします。

晴れの日の優しさ(前書き)

前話をプロローグするならば、この話は1話目です。

晴れの日の優しさ

イツシュ地方。そこは3年前にプラズマ団というポケモン解放という名目の上でのその地方の制圧を目論んだ組織があったところだった。しかし、旅立って数ヶ月の少女を中心にその組織は崩壊を余儀なくされた。

その後、その組織の7人の賢者のうち、6人が国際警察に捉えられたが、残りの1人を未だ捉えることができていない。

また、その組織に崇められていた（正確には利用されていた）少年も未だ行方不明。

そんなこんなで組織崩壊から3年が過ぎようとしていた。

激しい雷雨のあった次の日、その少女はヤグルマの森を歩いていた。彼女が歩いているところは舗道されたところではなく、獣道ともとれる天然の迷路と呼ばれるところを歩いていた。……平然と、スタスタと。

そんな彼女があるところで足を止めた。止めざるを得なかった。彼女の目の前には多少濡れている少年とイツシュ地方では珍しいポケモン、リーフィアがボロボロな姿で倒れていた。

「な、何！？　これは………いつたい？」

少女は相当驚いている。これを見て驚かない人は非常に少ない、と思う。

少女は少年の鼻の近くに手を当てた。弱くではあったものの、息を感じていた。

「大丈夫。まだ、生きてる！」

先程まで多少焦っていた少女ではあったが、生を確認して落ち着きを取り戻し、大型の鳥ポケモン、ウォーグルを出した。

少女はまず少年を背中に載せ、その後リーフィアを載せてから自分も乗った。

「ヒウンシティに。……………急いで！」

少女の言葉にウォーグルは頷くと力強く羽ばたいて上空へと上昇した。その後、近くに見えていたイッシュ地方最大の都市、ヒウンシティに到着した。

* * *

少女はその後、病院へと彼等を連れていった。

幸い、外傷はそれ程酷いものではなく、リーフィアも少年もすぐに回復した。しかし、少年のほうは意識のほうが未だに回復しておらず、入院することになった。

「大丈夫かなあ、彼……………」

心配なのか、少女は病院に残ることにした。

そして3日後、とうとう少年が目を覚ました……。

晴れの日の優しさ（後書き）

次回は少年と少女の名を明かしたいです。

では、感想待ってます！

記憶不明（前書き）

ちゃんとうまくできているかが心配です。

では、どうぞー！

記憶不明

「あ、気がつきました?」

少女が少年の目を覚ましたことに気づき、ベッドに近づく。

少年のほうは目を少しキョロキョロさせている。少し辺りを見回して少女が目に入ったのか、彼女は見ていた。

「あの、大丈夫ですか? 森で倒れていたときは吃驚しましたよ。外傷もそう酷くなかったのでよかったです」

少女は笑顔で少年に言った。

(倒れていた? 僕が?)

少年は少女の言葉を聞いて頭の中の記憶を探ろうとした。

「私、如月ホワイト、って言います。あなたは?」

少女、ホワイトは自分の名前を言うと少年に名前を訊ねた。

(僕は……あれ? 思い出せない? そんな……。でも……)

彼は頭の中で記憶をさらに奥深くにまで探ろうとした。しかし、どこを探しても結果は同じであった。

「……………誰?」

少年の出した答えはホワイトの問いのものになっていなかった。

「え？」

「僕は……誰？ 何で……倒れていたの？」

少年の目は何を見ているのか分からない。

ホワイトは彼の様子を見て一つの結論を出した。

記憶喪失………というもの。

その後、ホワイトは幾つか質問したが、知識だけは残っていて、肝心の過去のエピソードが消えていた。

「あの、もし分からないならあなたの持ち物から探していいですか？」

ホワイトが少年にそう訊ねると彼はすぐに頷いた。

彼女は彼の持ち物を一つ一つ丁寧に確認していった。その中にある身分証明書にあたるトレーナーカードを見つけて、それに書かれていた名前や年齢を見ていた。

「ふーん。あなた、黒崎レイ、っていう名前なんだ。年齢も殆ど私と同じなんだね！」

年齢を確認するとホワイトは敬語止めて少年、レイに話す。

レイと呼ばれた少年のほうは特に気にしている様子はなかった。

「そうそう。あなたのリーフィア、すっかり回復して元気になったよ。………と言ってもあなたは何かあったのかは覚えてないんでしようけど………」

「え？」

ホワイトはそう言ってリーフィアの入ったボールをレイに渡そうとする。しかし、彼は何故か動きが止まっていた。

「どうしたの？ あなたのポケモンよ」

「え、ああ……。ありがとう」

彼はお礼を言ってボールを受け取った。

その後、記憶以外には特に障害を見られなかったので、次の日には退院した。

（一体、誰なんだろう？）

退院して外に出たのはいいが、彼は自分のことに未だ疑問を持っていた。

そんな様子を見ていたホワイトは彼にある提案を持ちかけた。

「ねえ、私とバトルしない？」

彼女の提案はあまりにも唐突なものであった。

記憶不明（後書き）

やっと、キャラの名前が出せました！

ホワイトはBWの主人公がモデルです。

レイのほうはオリジナルです。モデルはありません。

始まりのバトル！ ダイケンキVSグレイシアー！（前書き）

バトル描写は難しいです

書いているこつちが混乱しそう……

その上容姿の説明も全く出来てないし

今回は少し長めです。どこで切れば良いのか分からないままやっただらこうなりました

始まりのバトル！ ダイケンキVSグレイシア！！

「……………は？」

あまりに唐突すぎたのか、レイの思考は停止した。

「あ、いや……………。バトルすれば何か思い出すかもしれないじゃない？ 嫌なら別にいいけど」

相手がトレーナーだと分かっているからこそきけること。

ポケモンバトルというのは本来は自分や相手の実力を計ったり、トレーナーとポケモン、トレーナー同士等が交流を深めたりするために行うことではあるが、何かしらのきっかけを作るにはいいことかもしれない。

「うん、……………いいよ」

レイが了解を出すと二人は広場まで移動した。

* * *

「じゃあ、いくよ！」

ホワイトが声をかけるとレイは頷いた。そして二人はボールを投げてポケモンを出した。

「頼んだよ、ダイケンキ！」

「頼むよ、グレイシア！」

ホワイトはダイケンキ、レイはグレイシアをそれぞれ出す。2体が着地するとバトルが動き出した。

「ハイドロポンプ！」

先に動いたのはダイケンキ。口から大砲の如く水を発射する。それはものすごい勢いでグレイシアに向かった。

一方、そのグレイシアは不思議な光を身に纏い、水を反射させてダイケンキに跳ね返した。それがダイケンキに当たる。

（え……………？）

ホワイトはダイケンキの心配やグレイシアの出した技には疑問を持たなかった。指示もなく動いたグレイシアに対して疑問を持っていた。

「一体、何が……………」

「れいとうビーム！」

レイの指示を聞くとグレイシアはすぐに氷のエネルギーをビーム状に口から発射し、それをダイケンキに当てる。ダメージ自体は少ないが、足下が凍りついていた。

「な、何！？」

考え事の最中だったのか、ホワイトは未だ状況を飲み込めていない。

「はかいこうせん！」

ホワイトはレイの言葉を聞いて現実に戻る。

グレイシアは既に青白いエネルギーを口に貯め、ビーム状に発射していた。

「ハイドロカノン！」

焦った状態のまま、ホワイトはダイケンキに反撃の指示を出す。しかし、ダイケンキが口に水のエネルギーを貯め出した頃には既にグレイシアのビームが直撃していた。

次にダイケンキを確認出来たのは、戦闘不能のときだった。

「……………お疲れ」

ホワイトはそれだけ言うとダイケンキをボールに戻した。

一方、レイとグレイシアは戯れていた。

ホワイトはそんな彼等に近づいていった。それに気づいたレイはホワイトに視線を向ける。

「あなた……………、何者なの？」

先程のバトルで疑問を持ったホワイトはそれを素直にレイにぶつける。

「……………」

レイは黙り込んでしまった。そして考え事を始める。何か思い当たるようなことが頭の中に浮かびかけてきていたが、すぐに消えてしまった。

「……………分からない」

「……………え？」

「分からないんだ、僕も……………。何か思い当たる節があつたんだろうけど、でも……………」

「何も思い出せないの？」

ホワイトが先に結論を言うとそれにレイは頷く。

少し間を置くとホワイトはまた質問する。

「じゃあ、これからどうするの？」

その質問にもレイは黙り込む。しかし、先程とは違ってすぐにはつきりとした答えが出てきた。

「自分を探す」

「……………え？」

「自分を探す旅に出る。自分がどういった存在なのか分からないまま生きているよりも、ちゃんと自分のことは分かっていたほうがいいから。例え、それがどんなに過酷なものであつたとしても……」

レイの言葉を聞くとホワイトは驚きはしたが、微笑んだ。

「そっか。じゃあ、私もついていていい？」

ホワイトの言っていることに今度はレイが驚く。声は出ていないがそれは表情を見るだけで明らかであつた。

「あ、別に嫌ならいいのよ。私は単にある人を探してるだけなの。もう3年くらいになるけど……。それに、私は色んなところに行ったことがあるからあなたの手助けにもなると思うんだ」

それを聞くとレイは笑い出した。

「な、何で笑うの!？」

「いや、君って面白いな、って思つて。別に構わないよ。手助けなら欲しいところだったし」

レイの答えを聞くとホワイトはまた微笑み、歩き出した。

「どこへ？」

「ヤグルマの森。あなたはそこで倒れてたのよ。そこに行けば多少は自分のことが思い出せるかもよ?」

レイはそれを聞くと頷いて彼女について行った。

これはまだ、始まりである。今後起こりうることの始まりにしかすぎなかった。

この二人の、出会いは……。

始まりのバトル！ ダイケンキVSグレイシア！！（後書き）

ポケモンの世界におけるバトルは基本的にそういうものだと私は勝手に解釈しています。実際にどうかは知りませんが……。

多少長くはなりましたが、感想のほう、お待ちしています！

この話はかなりぶっ壊れていると思います（注：これは注意事項と舞台設定です。これは題名の通りです。先に出しておくべきだったような気がします。

この話はかなりぶっ壊れていると思います（注：これは注意事項と舞台設定です）

～まずは注意事項～

* 原作キャラの関係が壊れます。

* 原作キャラが多少壊れるかもしれません。

* 時系列が原作通り（？）ではありません。

* 話の関係上、あちこちを飛びます。

* バトルは少なめです。

* ポケモンより人間トレーナーが中心です。

～続いて舞台設定～

このお話はイッシュ地方におけるプラズマ団の事件、崩壊・壊滅から3年経過した話です。

出てくる地方はそれぞれ原作の舞台となった各地方（おそらく全て）となります。

この話はかなりぶっ壊れていると思います（注：これは注意事項と舞台設定です

こんな話ですが、今後ともよろしく願います！

何かであれば今後増えるかもしれません。

やっちゃった感ありますが、気にせずいこうと思います。

あなたを見つけた場所（前書き）

本日二度目だったりします。

何だか寂しい気がします。

…色んな意味で。

あなたを見つけた場所

「ここがヤグルマの森。あなたが倒れていたのはもう少し先のほうよ」

レイはホワイトに連れられて歩いていった。

二人はヒウンシティを出た後、約1時間程歩いてヤグルマの森に着いた。彼等が歩いているのは舗道されたところではなく獣道のようなところであった。

「ねえ、本当にこんなところに倒れていたの？」

「うん。信じられないでしょうけど」

二人はさらに歩く。彼等はやがてホワイトがレイの場所に辿り着いた。そこは、他と特に変わったようなところは見られなかった。

レイはその場にしゃがみ込んだ。

「どっつ？」

黙り込んでいるレイにホワイトは訊ねる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………何か言ってくれない？」

あまりに何も言わなideいたのか、ホホワイトは苦笑してしまう。それでもレイは黙り込んでいたのだが、何かに気づいたのか口を開いた。

「ここ、誰かと戦った……………」

「え？」

「そのとき使っていたポケモンは、確か……………」

「リーフィア、じゃないの？」

途中で話すのを止めたレイは考え込む。ホホワイトはそんな彼にそのとき一緒に倒れていたポケモンの名を言うが驚いたことに首を横に振った。

「じゃあ、何のポケモンなの？」

「分かんない。でも、リーフィアではなかった気がするんだ……………」

レイはそう言いつつもリーフィアをボールから出した。その様子を見ていたホホワイトは疑問に思った。

（じゃあ、何でリーフィアを出したのよ？）

彼女は苦笑しつつもレイとリーフィアを見る。

リーフィアは辺りを見渡すと何かに感ずいたような雰囲気を出した。

「もしかしたら、リーフィアは何か覚えてるんじゃない？」

ホワイトがそう言っているとレイもそう思ったのか、リーフィアに訊いてみる。しかし、リーフィアのほうは首を横に振った。

「そうか。じゃあ、ボールに戻ってて」

レイはそう言ってリーフィアをボールに戻した。

「何も分からないまま、か……………」

様子を見ていたホワイトがそう呟くと彼女のケータイが鳴りだした。彼女は通話ボタンを押すと電話先の相手と話し出した。

「……………もしもし？」

「あ、ホワイトー？ 元気にしてた？」

「シロナさん！」

ホワイトは電話先の相手の女性をシンオウ地方のチャンピオン、シロナと確認するとそのまま話し続けていた。彼女達が知り合ったのはホワイトがシンオウ地方に行ったときだった。

「一体どうしたんですか？」

「いやね、あなたが少し前に言っていた黒崎レイ君のことなんだけ

ど、少し分かったよ」

「本当ですか!?!」

「ええ。そのレイ君はカントー地方の出身で生後たったの数ヶ月でヤマブキシテイの孤児院に入れられたらしいの。だけど彼が3歳のとき、その孤児院が爆発したんだって。幸い、怪我人が出なかったみたいだけど、行方不明者が1人いるの。未だその人は見つかったいないんだけど、その行方不明者の名前が黒崎レイなんだって。名前が同じだし、もしかしたら何か手がかりが掴めるかもしれない。こっちでももう少し調べてみるから分かり次第連絡するね」

「分かりました、ありがとうございます!」

ホワイトは話を聞き終わると電話を切った。そして、未だ考え事をしているレイに近づく。

「あなたに関する情報が少し入ったよ」

「え?」

「場所はカントー地方のヤマブキシテイ。あなたがいたかもしれないところよ。行ってみましょう?」

ホワイトの言葉に少し間を置くが頷いた。

あなたを見つけた場所（後書き）

意味不明なことばかりな気がしてならないです。

ケータイのことですが、普通に携帯電話だと思ってくれれば構いません。ポケギアとか使おうと思いましたが、結局こうなりました。

では、感想お願いします！

何だか珍しい（前書き）

文化祭が終わりました。

今日は代休で昼過ぎまで寝てました。準備や後片付けで疲れたのか、昨日はおかしくなりましたが………

何だか珍しい

数日後、彼等は船を漬かつてカントー地方に到着し、ヤマブキシテイに着いた。彼等はその街を歩いてた。レイはキヨロキヨロと見回していた。ホワイトは地図を見ていたが、彼の様子が気になったのかレイを見る。

「高い建物とか気になるの？」

「うん。こういうの、あんまり見たことないような気がする……。それに、こういうの見てるとあまり外に出ていた気がしないんだ」

レイはそう言いつつ、あちこちを見回し続ける。その目は本当に周りが物珍しい、というべきものであった。

ホワイトは少し顔を歪ませた。

「……………ねえ、そうやってキヨロキヨロするの止めてくれない？ 周りにも迷惑だし、こっちが恥ずかしいから……………」

「え、ああ」

彼に言うところホワイトは再び地図を見始めた。

暫く歩いて二人はある大きな建物の前で立ち止まった。

「……」

ホワイトは地図を閉じて続けて言う。

「ここが、あなたがいた孤児院が建っていた場所よ」

そこは、十年程まえに再建された孤児院。

二人はその建物に入っていった。中は清潔感に溢れていて、整備が行き届いていて、設備も充実していた。

中では子供達がはしゃいでいた。小さな幼児からレイ達と同じくらいの子供、それよりも大きな人達もいた。

殆どの人達は元気にはしゃいでいるが、中には元氣のない人もいた。

「……………いっぱい、いるわね……………」

ホワイトはその数に驚き、悲しんでいた。

一方、レイは少し落ち込んだ様子であった。

(似ている……………。何かは分からないけど似てる……………)

悲しみに満ちた目で辺りを見ていた。

少ししたとき、レイは足下に何かがこすりつけられるようなものを感じた。それに気づき足下を見るとそこにはイーブイがいた。

「あら、可愛いイーブイね。ここにはポケモンもいるのね」

ホワイトも気づいてしゃがみ込む。レイはそのイーブイを抱き上げ

た。イーブイは喜びを表すようにレイに甘えてきた。

そんな彼等にレイと同じくらいの少年と少女が近づいてきた。二人もそれに気づく。

「へえ、そのイーブイが人に甘えてなつくなんて珍しいな」

少女がイーブイを指さしながら言う。

「確か、オレ達と同じくらいの子供がそのイーブイとよく遊んでいたなあ。最も、その子自身は他のポケモンとも打ち解けていたけどな」

少年がそう言うのとホワイトは彼等に質問し始めた。

「その子供、何て言っていました？」

その質問を聞くと二人は顔を見合わせて、少し間を置いて答えた。

「さあ？ 名前はあまり聞かなかったわね」

「でも、十年程前のこの施設の爆破事件のときから行方不明だ、って聞いているな。2、3年くらい搜索したらしいけど、結局見つからなかったらしいね」

「そう、ですか……………」

二人の答えを聞いてホワイトは手掛かりを掴みかけてたが、少し落ち込んでしまった。

「わあ、すごい!!」

「この兄ちゃん、ポケモン達にすくなつかれてる!!」

「ポケモンを手玉にとってるみたーい!!」

3人が会話していると少し離れた所にポケモンや小さな子供達がレイの周りに集まり、戯れていた。

「ちょ、くすぐりたいよ……」

レイは笑いながらそう言うが実際は相当苦しんでいるように見えた。

「すげえな、ありゃ……」

「ポケモン専用のモテオーラでもあるのかしら？　少し羨ましいわね……」

「……って、そんなこと言ってる場合じゃないです！　早く彼を助けないと!!」

苦笑しながらも呆気にとられていた二人にホワイトは突っ込みを入れた。そして3人はレイ近づいていった。

レイは何かしてボールを一つ取り出して、そこから1匹のポケモン、ピカチュウ（丸みを帯びた尾の形からしてメス）を出した。

「ピカチュウ、このこ達をどうにかして!!」

ピカチュウは呆れて溜め息をついた。しかし、すぐに彼の周りに集まっているポケモン達に指示を出していった。

ポケモン達が、レイから離れいった。

このさき、晴れ間が見えません

「え？」

「は？」

「嘘っ!？」

ピカチュウの指示によって動き出したポケモン達。ホワイト達3人は驚いた。

ポケモン達はまだレイの近くにいるが、それでも先程のように纏わりついてはいなかった。

レイはというと、先程の状況から解放されて深呼吸していた。ピカチュウはレイに近づいて首を傾げる。

「サンキュー、ピカチュウ。助かったよ」

レイがお礼を言うとピカチュウはそっぽを向いて鼻で溜め息をついた。

「すごいな……………」

「うん。あれだけのポケモンを一瞬にして動かすなんて……………」

少年と少女は呆氣にとられていた。

ホワイトはレイに近づいてしゃがみ込む。

「大丈夫？」

「うん。死にかけたけど……………」

未だに深呼吸しているが、だいぶ落ち着いてきたレイを見てホワイトは安堵の息をついた。

「にしても、何でこんなにポケモンが集まってきたんだろ？」

「それ、僕が訊きたい……………」

レイは一番に疑問に思っていたことを先に言われ、ホワイトにジト目を向ける。ピカチュウまでホワイトにジト目を向ける。ホワイトはその一人と一匹の視線に目を合わせられなくなり、別の方向を向いていたが、それでも痛みを感じ取っていた。

（この二人、あまりにも視線が痛すぎる！）

視線を外していたはずのホワイトだが、物理的攻撃でもうけているのでは、と思える程に痛さを感じていた。

「にしても、何でポケモン達はレイ君に近づいたのかしら？」

少女の言葉にハツとして、二人はポケモン達に視線を移す。

よく見るとポケモン達はレイに対して目をキラキラ輝かせて見えていた。

「何だか、僕が来るのを待っていたみたいだね」

レイの言うことに三人は頷く。

三人はすぐにポケモン達を別の場所へと移した。レイも手伝おうとしたが、先程のようになっても困るのでその場から動かずにいた。

「でも、レイは以前ここに来たことがあるのか？」

全ての移動が終わると少年がレイに訊く。

「そう、みたいです」

「みたい？ どういうことだ？」

「……………」

「彼、記憶喪失なんです」

黙りこんでしまったレイの代わりにホワイトが言い出した。

「そして、十年程前の爆破事件のとき、行方不明になった人です」

「えっ!？」

「そうなのか!？」

「はい。しかし、その後のことがよく分かっていません。手掛かりを見つけようとここへ来たのです」

二人はただただ驚くばかりであった。

「君が、そうなの？」

「らしいです。よくは知りませんが……………」

「しかし悪いな。オレ達は何も知らないんだ」

「でも他の人にも訊いてみたら？　もしかしたら、誰かしら覚えている人もいるかもよ？」

二人に言われてレイとホワイトは顔を見合わせて頷いた。

* * *

しばらくした後、二人は孤児院を出てベンチに座っていた。

「結局、特にこれといった情報は得られなかったわね……………」

レイは黙って頷く。

あの後、二人は色々な人に話を訊いたが、十年程前のことだったのか覚えていない人はそういなく、彼の手掛かりも見つけられなかった。しかし、行方不明者が見つかって心配してくれている人もいた。

「まあ、覚えているほうがおかしいかもしれないけどね」

「それもそっか」

二人は空を見上げる。空はあまり晴れ間が見えず、雲がだんだんと

黒くなっていた。

「問題は、手掛かりはまだゼロ、ということね」

レイはまた黙って頷いた。

雨の日というもの

その日、雨が降り出してきたので、二人はヤマブキシティのポケモンセンターの宿泊施設で一泊することにした。そのある一室でホワイトは外の様子を見ていた。レイはグレイシアの毛繕いをベッドの上で座ってしていた。

「雨、今日も強いわね……………」

レイは毛繕いの手を止めるとホワイトに視線を向けた。グレイシアは彼の膝から降りて先に受けていたピカチュウとリーフィアのいるところに行った。

「今日、も？」

レイが訊ねるとホワイトは彼と向き合う。

「ええ。あなたを見つけた前日の夜、その日も雨が降っていたのよ……………」

そう言っつてホワイトはレイの隣に来て座る。

「まあ、相当強く降っていて、雷も鳴るくらいの嵐みたいなものだったけどね」

ホワイトはレイの様子を伺う。彼は考え事をしているようだった。目の前ではレイのポケモン達が既に寝息をたてていた。

「どうお？ 何か思い出せない？」

ホワイトに訊かれてもレイは黙ったまま考え事に耽っていたが、暫くして口を開いた。

「雨……………」

「……………」

ホワイトは黙ったままレイの言葉に耳を傾ける。

「そういえば、走ってた気がする。戦いもしたけど何かを失った…………、そんなことがあった気がする」

「ふん。じゃあ、ヤグルマの森で何かを失ったってこと？」

ホワイトの質問にレイは首を横に振る。

「確かにその日のこともあった気がするけど、もっと前にあったよ
うな…………、そんなかんじ」

レイは更に考え事をする。ホワイトも黙り込む一方であった。

「…………私、先に寝てるね？」

「ん、分かった」

ホワイトは髪止めのゴムを外してベッドの中に潜り込んだ。

レイはその後も考え続けていた。

数時間後、未だ雨の降り続ける夜中にホワイトは目を覚ました。

「んゝ、まだ夜中の1時過ぎ……………」

時間を確認し、目をこすりながら隣にあるベッドを確認した。しかし、そこには誰もいなかった。

「……………レイは？」

辺りを見回し、バックや上着があり、ポケモン達がいることを確認する。

「どこ行っただろ？」

ホワイトはベッドから降りて傘を持って部屋を出た。

「一体どこにいるのよ？」

ポケモンセンターから出て30分程経っただろうか。まず、街中を軽く探したが見つからず、街の外に出てきていた。そう遠くには行っていない、と信じながら。

「全く、せめて書き置きぐらいしてほしかったかも……………」

文句をブツブツ言いながら歩いていた。

その時、少し遠い所から音が聞こえてきた。

「……………何の音かしら？」

疑問と興味からホワイトはそちらに移動する。

「ほぐら、もう大丈夫だよ」

「……………え？」

ホワイトが来たのは小さな池。そこにいたのはレイと包帯を尾に巻いたニヨロモ、そして数匹の仲間と思われる群がいた。

「後は無理をしないこと。下手をすれば悪化に繋がるからね」

レイの言葉にニヨロモは元気に返事して他の仲間と一緒に池に戻っていた。

レイは立ち上がり振り返ると後ろにいたホワイトに気づいた。

「!?!」

「!?!」

そして、二人は驚く。

「……………」

「……………」

二人は黙り込んだままだった。

不思議な能力（ちから）

二人とも驚きの表情のまま黙り込み、突っ立っていた。

「……………取り敢えず戻らない？ 雨も降っているし、このままだとあなた、風邪ひくよ？」

沈黙と静寂を破るようにホワイトは呟くように言う。レイは頷いてそのままポケモンセンターに戻っていった。

* * *

部屋に戻った後、先にホワイトがシャワーを浴びた。その後、レイが浴びる。

レイはシャワーを浴びている最中、そこにある鏡で自分の裸体を見ていた。そのとき見えた自分の左胸にある傷に気づいて、それに触っていた。

「……………何だろう、これ？」

今まで気づかなかったのか、初めて見つけたかのような疑問を持った。

「気にしても意味はない、かな？」

誰に問いかけても無駄で仕方のないことだ、と決めつけて、考えるのを止めた。

＊ ＊ ＊

レイが浴室から出て服を着るとすぐにグレイシアとリーフィアにベッドの上に押し倒された。

「あはは、くすぐったいよ」

一人と二匹はそのままじゃれあっていた。もう片方のベッドの上でその様子を見ていたホワイトは微笑ましく思い、見守るように微笑んだ。ピカチュウは未だに眠っている。

「……………そろそろいいかしら？」

ホワイトが言うところじゃれあいをしていた一人と二匹は止める。リーフィアとグレイシアはベッドから降りて静かに寝息をたて始めた。レイはそのままベッドの上に座る。二人は向き合うような形になった。

「で、何であんなところに来たんだ？」

レイが先に口を開いてホワイトに訊く。

「それは私が訊きたいわよ！ 私はただあなたを探しに行っただけ！ ポケモンセンター内にも街中にもいないから外に出てさがしたあそこにいた、というだけだよ！！」

ホワイトは叫ぶように少し大声で言う。レイは煩いと感じたのか、耳を塞ぎながら聞いていた。

「煩い。もう少し音量を下げて……………」

ホワイトは慌てて口を塞ぐ。恥ずかしかったのか、頬が紅潮していくのが目に見えて分かった。

「で、僕が何故あんなところに行ったか、だけど」

レイは耳から手を離し、ホワイトの様子を無視して話を続けた。

「声が聞こえたんだ……………」

「……………声？」

ホワイトは話を聞きながら口から手を離す。そして、すぐに疑問をぶつけた。

「そう、声。最初は何だろう、と思って聞いてみたんだけど、“痛い”とか“助けて”とか聞こえたから気になって外に出たんだ。そして声のするほうに行ったらあそこに着いた、ってわけ。あのニヨロモ、怪我していたから治してあげたんだ」

レイは先程のことを全て言った。ホワイトは頷きながら聞いていた。

「ふーん。世の中には不思議なこともあるものね」

「……………？」

ホワイトは一人で納得し、そのままベッドの上に寝転んだ。

レイは疑問に思ったが、確かに不思議なことだと思い、ベッドの上

に寝転んだ。

不思議な能力（ちから）（後書き）

ネタバレという名の次回予告。いや、次回予告の時点でネタバレか（笑）。

次回は時間がかかり飛びます。ご了承下さい。

気持ち、そして変化（前書き）

お久しぶりです。

このお話はネタバレ要素が含まれていますので、ご注意ください。

あと、このお話でこの章は終了となります。

気持ち、そして変化

それから、二週間程の月日が流れた。二人は特に手掛かりがないまま、ある森に来ていた。

「あの〜、ここ、どこ?」

「……………」

彼等はその森の中で立ち止まっていた。レイは切り株に座り、ホワイトは地図を開いて近くに立っていた。

「ねえ、ここ、どこ?」

暫くしてレイはまた訊くが、ホワイトは黙り込んだままだった。

「あは、あは、あははは……………」

やがて、不気味な笑い声をあげるようになった。

「……………どうしたの?」

その笑いがあまりにも不気味に思ったのか、レイは引きつった表情になり、引き気味になりながらも彼女にさらに訊いた。

「ごめん、迷っちゃった……………」

ホワイトが地図の画面表示を見せながら言う。そこには“ERROR

R”と記されていた。

「……………はぁ？」

それを見たレイは呆れていた。

「ホントに……………ごめん」

ホワイトはうつむいてしまった。

目の前で落ち込んでいるホワイトを見てレイは溜め息をついてある提案を出した。

「ウォーグルで空から探してみるの？　これだけ晴れていれば空からでも探しやすいだろうし」

それを聞いたホワイトは顔を上げてなるほど、と思い、ウォーグルをボールから出して指示した。ウォーグルは頷いて上空に上がって姿を消した。

「……………暇だ」

その様子を見ていたレイは呟くように言った。一方、ホワイトはその場にしゃがんでボールからゾロアークというポケモンを出すと、毛繕いを始めた。彼は気持ちよさそうに目を閉じて鳴いた。

（そつえば、彼はどうしているんだろう？）

ゾロアークを毛繕いしながらホワイトは今探している彼のことを考えていた。しかし、ある疑問も生まれた。

（最近、彼のこと考えてなかった気がする……………）

何故、と思った彼女だが、理由は全く思いつかなかった。

その彼とは3年前、ホワイトがまだ旅立った頃に出会った。そのときのホワイトは彼を変な人だと思ったが、その彼と何度か会う度にある気持ちが募っていった。それは当時は分からなかったが、彼と最後に戦った時に分かった。しかしその彼は、ホワイトが偶然にも巻き込まれた事件を引き起こした組織に利用されていた。その終結のとき、ホワイトは彼からあるポケモンを受け渡された。彼はそのままどこかへ消えてしまい、未だに消息が分かっていない。

ホワイトはその後、その彼を見つげるために各地方を回った。しかし、見つかることは一切なかったが、それでも彼女は彼のことを思い続けていた。

……………はずだった。

ところが最近、レイと会ってからのというものの、彼のことを考えたことがあまりなかった。あんなに思い続けていたのにも関わらず、ホワイトは今の今まで考えたことがなかった。

毛繕いを止め、ホワイトは不思議に思っただけで暇そうにしているレイを見た。ゾロアークは一旦体を伸ばすとボールに戻った。

ホワイトはレイを見ながら今までのことを思い出していた。特にバトルのこと。その強さは彼女が見てきたどのトレーナーよりもはるかに上であった。しかし、それ程強いトレーナーなのに今まで彼の名前を聞いたことがなかった。その強さは一体どこで身につけたのか、ホワイトは疑問に思う一方であった。

そしてもう一つ、疑問が生まれていた。

（私は彼をどう思っているんだろう？）

少なくとも嫌いではない。これは確かだった。だが、好きというには何か足りない気がした。

ホワイトはこれ以上は考えたくない、というように目を閉じて首を横に振り、レイを見た。そしてどこか痛むような感覚を覚えた。

（今のは……………何？）

分かりたいような分かりたくないような……………、そして、彼に変化が訪れないようにと何故か考えるホワイトであった。

（フフツ、何を思っているのかしら？）

自分の思っていることがバカらしいと考え、心の中で笑ってしまい、空を見上げた。

「あ、ウォーグル！ 戻ってきたのね」

そこには丁度戻ってきたウォーグルがいた。レイも空を見上げて彼がいることを確認する。二人は立ち上がってウォーグルの後を歩いて行った。

暫くして二人は森を抜けた。ホワイトはウォーグルにお礼を言い、ボールに戻した。

「見て、町だよ！」

レイは前方を指差して言う。そこはある程度ビルが建ち並んでいた。

「よかった……、ありがとうね！」

レイは笑顔でホワイトに言った。彼女はそれを見て顔を赤くしてうつむいてしまった。

「どういたしまして」

ホワイトはレイの先を歩いた。そのことを不思議に思ったレイは首を傾げたが、すぐに彼女の後についていった。

気持ち、そして変化（後書き）

久々の更新でした。

次話から新章に入ります。何だかポケモンをあまりだしていなかったような気がします……。。

まだ、分からないまま……………（前書き）

さて、このお話から新章に入ります。そしてこのお話からゲームのことがだいぶ絡んできます。

この章はゲームをもとにしたオリジナルの話となっています。そのため、納得出来ない！と思われるところもあるかもしれませんが、ご了承ください。

では、スタート！

まだ、分からないまま……

二人が出会って1ヶ月が経とうとしていた。然し、それでも分からないままであった。

これは、そんなときに二人がある人物と出会い、そして今、三年前のことに本当の決着・終止符が打たれようとしていた……。

* * *

二人はイツシュ地方に戻って今はライモンシティに来ていた。

「ふう」

レイはベンチに座って溜め息をついた。そして考え事に耽っていた。

思い返してみると色々とおかしいと思うことが多々あった。まず、家族。連絡手段が無いとは言え1ヶ月も連絡がなければ不安がつて何か手を打ってくるはず。当然彼は家族のことを知らない。二つ目それは外のことだが珍しいと考えるまいこと。記憶喪失だからかもしれないが、何もかもが珍しいものだと思っていた。そして三つ目言われるまで気づかなかったが、ポケモンバトルが強い（当の本人はらしいと思っている）ことが、確かに疑問であった。

（もしかして、どこかに閉じ込められていた？）

他にも色々あるが、これだけ思い出してみてもそう考えることが出来ていた。そう考えれば何故か納得している自分がいる、と思うレ

イであつた。

「……………考えても分からないままか」

レイはそう呟いて考えることを止め、腕をほどくと隣で寝ているピカチュウの頭を撫でていた。と、同時に彼の頬に何か冷たい物が当たり少し吃驚した。それが離れたことを確認するとそれを当ててきた人物をジト目で睨みつけた。

「……………何すんだよ？」

「いや、随分と難しい顔をしていたなあ、と思って」

ちよつとね、と付け足して言つてホワイトは手に持っていた缶コーラの一つをレイにむけた。

「……………どうも」

無愛想にもレイはそう言つてそれを乱暴にひつたくるように取った。ホワイトは少し吃驚していたが、彼の隣に座りもう一つの缶コーラを開け、

「……………ブツ!？」

噴き出したコーラを顔面に受けていた。

レイはそれを見て呆れて溜め息をつき、少し離してそれを開けた。案の定、コーラは間欠泉のように少し噴き出した。その状態を見たレイは再びジト目になってハンカチで顔をふきながら彼を見ている

ホワイトを睨みつけた。

「随分と乱暴にして持ってきたようだな？」

「アハ、アハハハハ………」

そう言われた彼女は苦笑して、ごめんと言ってシュンとなった。

レイは再度溜め息をつき、一気にコーラを飲み干した。

暫くしてホワイトも飲み終えた。そして、人込みを見ていてある人物が目に入って見開いて驚いた。

(う……………そ?)

三年前から探していた彼。忘れるはずもないあの人が今近くにいて、考えたホワイトは立ち上がって走っていき、人込みに姿を消した。

「ちょ、ちよつと!？」

突然のことで驚いたのかレイも立ち上がるが、それと同時にピカチュウも目を覚まし、険しい顔つきをしてホワイトとは別の方向へ走り出した。

「え、ちょ、ピカチュウ!？」

レイは戸惑い、一瞬迷っていたが、すぐにピカチュウのあとを追いかけた。

「どこに行くんだよ、ピカチュウ!」

少し叫ぶようにレイは言うがピカチュウは立ち止まらなかった。周りが変な目で彼等を見ていたが、レイは一切気にしていなかった。

「どこに行くんだよ！？ ピカチュウ！！」

まだ、分からないまま……………（後書き）

レイのコーラが噴き出したのは彼が乱暴にひったくった、というのもあるんですがね……………（苦笑）

再会、でも会いたくない（前書き）

因みに言っておきますが、この章で出てくるお話は原作には出てきません。予め言っておきます。

ラストのほうは表現が少し生々しいと思います。何とかしろ、と言われても無理でした。

では、本編どうぞ。

再会、でも会いたくない

ホワイトは街中を走っていた。先程見つけた少年が自分が本当に探している人なのかどうか確かめたい。そしてもしそうならば、彼と話したい事がある。その一心で走っていた。

「どこ行っただろう？」

走っている途中で見失ってしまったのか、ホワイトは立ち止まってキョロキョロした。

（会える…、そう思っていたのに……………）

ホワイトはがっかりして肩を落とした。

「ホワイト……………」

不意に後ろから自分を呼ぶ声が聞こえ、ホワイトは振り返った。そこに彼がいた。

「やっぱりホワイトなんだね？」

早口なのは相変わらず。少し声が低くなったことと背丈が高くなったことを除けば3年前に会った彼がいた。

「N……………」

呼ばれた本人は嬉しそうに言っているように聞こえたが、言ってい

る本人はその声がどこか悲しく聞こえた。

* * *

二人はすぐ近くのベンチに座っていた。暫く黙り込んでいたが、ホワイトが先に口を開いた。

「今までどこ行っていたの？」

彼女は開口一番に訊きたいこと言った。

「特に決めた場所はなかった。さらに強くなろうと思って世界のあちこちを見てきたんだ」

Nはすぐに答える。するとホワイトはまた質問する。

「どう思った？ 世界を見て」

「世界には色々なことがあるんだな、と思ったよ。この3年間だけでもあまりにも広すぎる。そして、自分も学ぶことがあったし少しは強くなれたかな、て思えるんだ」

相変わらずの口調の答えが返ってきて、ホワイトは少し安心していた。

「君はどうしていたんだい？」

「うん。私はあなたが心配で様々な地方に行って探していたの。まあ、それで色々な人に出会えたけどね」

Nの問いに、ホワイトは彼と似たような答えを返す。

「君も世界を見てきたんだね」

「うん」

Nに対して静かに頷くホワイト。その目はどこか悲しそうであった。そして二人は黙り込んでしまった。

「ねえ知ってるか？ 最近リゾートデザートで変な人を見るって」

「あ、私見たよ！ あんなところでよくフード被ってられるなあって思ったけど」

「あそこは平気だよ。寒暖差はそんなにないし」

「そうだな。俺も見ただけど、以前にも見たことがある気がするんだよなあ」

「あ、それあたしも思った。けど、どこで見たんだろ？」

二人の耳に聞こえた数人の学生の会話。偶然とは言え、ホワイトは好奇心を掻き立てられ、聞き入っていた。その様子を見ていたNは笑う。

「な、何？」

「いや、君は相変わらずだね、と思って」

それを聞いたホワイトは少しムツとする。しかし、そんなことはお

構いなしにNは続ける。

「でも、君らしいね。どうするの?」

それを聞くと今度は不適な笑みを浮かべる。

「そりゃあもちろん!」

聞くまでもなかった。立ち上がった二人はリゾートデザートへと向かった。

* * *

その頃、レイは……。

「いったい、どういうことだ?」

彼は今、少し暗い路地において、目の前の光景に驚いていた。

そこには、ポケモンやそのトレーナーにあたる人々が山積みになって倒れていた。しかも、焼け焦げた跡が見えれば、切りつけられて赤く鮮やかな血が流れているものも見え、分厚い氷に氷漬けにされているものも見えた。まだ息はあるのだろうか、うめき声をあげるものもいた。

このようなことをして、その山の頂上にいるもの達を見て彼はこう言った。

「何故、このようなことを……? ピカチュウ、リーフィア、グレイシア……」

その声は怯えから少し震えていたが、彼女達はレイを睨みつけて訴えているように見えた。

寧ろ、何故あなたはこうしないの？ と……………。

再会、でも会いたくない（後書き）

Nのこと、実はあまり覚えていないというのが現状……。こんな
感じであってましたっけ？

様々な方面での危機（前書き）

さて、また生々しい描写があると思われます。しかし、結構重要なところでもあります。

様々な方面での危機

「どうして…………？」

ピカチュウ、リーフィア、グレイシアの目を見てレイは悲しく言う。

「もしかして、これが僕だと言うのか？」

彼の言うことに3匹は静かに頷く。

「だとしたら、僕は何て残酷で冷酷な……………」

ヒトなんだ…………、そう震えて消えるように呟くと彼はその場から去って行った。そのとき、彼の瞳に涙が浮かんでいることに気づいた彼女達は顔を見合わせて慌てて彼の跡を追いかけた。

* * *

レイはベンチに座り、ぼんやりしていた。3匹は彼を心配する目で見ていた。

彼女達は忘れていた。そして、いつものことだと思ってやったのだが、それが今回のような結果に陥ったのだ。

* * *

レイはピカチュウの跡を追っていた。然し、途中で見失い、あちこち探すこととなった。人通りのない所を通ったそのとき、リーフィ

アとグレイシアがボールから勝手に出てきて、すぐ近くの路地に入ってしまった。その直後、電撃が見え、彼はすぐにその路地に向かった。

「リーフィア！ グレイシア！」

そこを見るとリーフィアとグレイシア、さらにピカチュウもいた。そして何人かのトレーナーと無感情で無機質のように見えるポケモン達もいた。そのなかには既に倒れているものもある。

（どこかで見たことある？）

彼等を見てふと疑問に思ったレイだが、それどころではなかった。

数では圧倒的不利。そう思っていたはずだが、自分のポケモン達は一切やられていなかった。然し、問題はそこではなく、彼女達の出しているパワーなのだ。何度かバトルはさせたがそのときは全く比べものになっていなかった。ピカチュウは焼き焦がすように電撃を大量に放出し、リーフィアは腕の葉を巨大化させて相手を切りつけ、鮮血を飛ばさせ、グレイシアは相手を一気に凍らせる程に広範囲に吹雪かせた。

その様子を見ていたレイは唖然としていた。そしてたった数分の出来事である。その戦いは終始彼女達の一方的な攻撃であった。その短い時間でレイは本当の自分が分かってしまいそうであった。

「いったい、どういうことだよ？」

* * *

「はぁ……………」

レイは溜め息をついた。それに3匹はびくつく。完全に落ち込んだレイに彼女達は声をかけずらくなっていた。

（あれが僕の姿、なのか……………」

レイはさらに自分のことが分からなくなっていった。

「はぁ……………」

そして、本日何度目か分からない溜め息をまたついていた。

「ほう。兄ちゃん、珍しいポケモンを持っているな？」

落ち込んでいて周りを気にかけていなかった彼等は急に声が聞こえて顔を上げた。周りは既にガラの悪そうな男達数人に囲まれていた。

「なっ!？」

「おっと、動くなよ？」

レイは立ち上がるがすぐに別の男にナイフを首もとに突きつけられた。後数ミリで首に刺さるのでは、という距離である。ピカチュウは戦闘体制に入った。

「お前達は動くなよ？ ご主人がどうなっても知らないぞ？」

ボス格の大男が彼女達に言う。そんなことはお構いなしに彼女達は目を合わせ、リーフィアがレイに向かって走りだした。

「う、動くな！　そう言っているはずだ！！」

レイを抑えている男が多少焦りを見せて叫ぶ。然し、それでもリーフィアはその速度を緩めない。それどころかさらに増していく。

「ぐあっ！！」

男はナイフを離し、もう片方の手で押さえ込む。その手には急激な痛みが走り、切り傷から赤い鮮血が吹き出していた。そしてレイは彼から離れ、ナイフを空中でキャッチする。彼はその刃をしまつてポケットに入れる。

「逃がすな！　取り押さえろ！」

大男が他の男に向かって叫ぶ。そしてレイの前に立ちはだかった。

「邪魔だああ！！」

レイが叫ぶのと同時に3匹が男達に向けて技を出す。それは、先程に比べて威力は控えめだが、道を切り開いて男達数人を気絶させるには十分であった。

「このまま逃げ切るよ！」

レイがそう言うところも頷き、ボールに戻っていく。彼はそのまま走り続けた。

「ちい！　待てえ！！」

男達も必死に追いかける。然し、レイの速さには追いついてなかった。

（待てって言われて、待つバカがいるかよ!!）

番外編：初めての夏祭り！（前書き）

本編は途中ですが、ここで番外編。本編とはあまり関係がないようにつくってみました。でも、ネタバレ注意です。

うちの近くでちょっとしたお祭りが開かれているのでかいてみました。

では、どうぞ！

番外編：初めての夏祭り！

夏。といえば、やはり暑い。そしてジメジメする鬱陶しさ。それが昼間だけでなく夜も続く日もある。それはここ、カントー地方等から離れたイツシュ地方でも同じことが言える。

しかし、夏には夏の楽しみというものがある。プール、海水浴、お盆、それに伴う実家への帰省。受験生にとっては勉強の日々……かもしれない。そしてやはり、屋台が開かれる夏祭りがある。

ここ、イツシュ地方のカノコタウンはホワイトの出身地である。レイはその彼女の家の近くに座り込んでいた。

「にしても、夜だというのに暑いね……………」

流石夏、というべきである。彼は普段着ている黒のジャケットを脱いで今は白の半袖のＴシャツを着て、自分の手で顔を仰いでいる。近くで向かい合うように座っているピカチュウも首を縦に振って頷き、同じようなことをしている。

「でも、今日はホワイトがお祭り連れて行ってくれるってね。僕、初めてだからどういうものか楽しみだよ！」

レイは幼い子供のように目を輝かせるように言う。それを見たピカチュウはにっこりと微笑んだ。

「お待たせ！」

そう言つて彼の目の前に現れたのは浴衣姿のホワイトである。彼女が着ているのは青を基調とした様々な色の花火をかたどつたものであつた。お腹には赤い帯が巻かれていた。彼女の姿を見たレイは顔を少し紅潮させ、そっぽを向いた。

「どうしたの？」

普段は見せないレイを見てホワイトは疑問に思つて訊く。

「あ、いや…。可愛いな、と思つて…」

「え…!?!」

視線だけをホワイトに向けるレイ。彼女もまた、顔を紅潮させた。しかし、すぐにクスリと笑つた。

「ありがとう!」

笑顔で素直にお礼を言うホワイト。レイは更に顔を赤くさせてうつむいてしまった。

ピカチュウは彼等のやり取りを見て苦笑し、やれやれというような仕草を見せた。

ホワイトは顔を赤くしながらもそれ以上に赤くしているレイの右手を左手で優しく握つた。

「ほら、早く立ち上がつて! お祭りに行くよ!」

「…うん!」

やっとの事でレイも立ち上がった。ピカチュウが彼の肩に乗ると二人は祭りが開かれているところに向かった。

その場所はすぐ近くにあり、歩いてすぐのところの屋台の行列が見えた。

「うわ……。すごいね、この人の数！」

レイはまず、その人の数に驚いていた。屋台の数、それらを営業する人々、そこに並ぶ人、屋台に挟まれた広い道を歩く人々。かなりの人数であった。

「そうね。でも、この町は小さいからまだ少ないほうよ？　大きくなれば屋台に集まる人数も増えるわ」

レイはホワイトの説明を頷きながら聞いていた。

彼等はまず、バスラオ掬いをした。通常、バスラオは凶暴なポケモンとして知られているが、そこにいたのは非常に大人しく、更に通常よりも小型なので、小さな子供達にも人気があった。彼等は掬った後のバスラオは営業者に返していた。そして、水風船を取ったり射的をしたりしていた。射的の景品はレイの狙いかなり正確だったのかポケモンをかたどったペンダントであり、歩いている途中でレイが水風船が割る、ということがおきた。

その後は木の実をかたどった大きめの飴を舐めつつ、焼きそばやオクタン焼き、トルネロスとボルトロスの綿飴を食べながら様々な屋台を見て回っていた。そして…。

「こつちよ、こつち！」

「ちよつと、どこ行くの？」

ホワイトが急にレイを連れ出して屋台の行列から抜けた。暫く歩き、ある広場に出た。

「ここは？」

「ちよつと待ってて。もう少しだから」

ホワイトはライブキャスターで時間を確認しながら言う。レイはどういうことなのか分かっていないのか、彼女にもう一度訪ねようとした。その時であった。

空が突然光り、そこに大きな花が咲いた。それはすぐに消えて見えなくなっていた。

「…え？」

何が起こったのかレイは分からずそのまま空を見上げる。すると、星空の中にまた一つ、また一つと花が咲いて光った。

「花火っていうの」

いつの間にか隣で座っていたホワイトが口を開く。彼女はレイに隣に座るように促し、彼はそのまま座る。

「ここ、隠れた花火の絶景ポイントだね。幼い頃、友達とよく来て見ていたんだ」

ホワイトは懐かしむように言う。

「祭り、どうだった？」

それをレイに視線を向けて言った。思ったよりも答えはすぐに返ってきた。

「楽しかったよ。それにこんなに綺麗なものも見れたし…。ありがとう！」

最後に言ったお礼のときの笑顔にホワイトは少しドキツとしたが、どういたしましてと呟いて彼の肩に顔を置いた。

番外編：初めての夏祭り！（後書き）

時期的には8月前半の頃です。気づいたかたもいるでしょうが、本編の時期は第一章は6月中旬、第三章は7月中旬の頃のお話です。

さて、分かっているかた多数だと思われますが一応説明。

バスラオ掬い：

金魚掬いです。本当はトサキントにしようか迷いましたが……。

木の実をかたどった大きめの飴：

リング飴です。それを木の実に変えただけです。

オクタン焼き：

そのまま、タコ焼きです。イッシュにタコにあたるポケモンが見当たらなかったので仕方なく……。

トルネロスとボルトロスの綿飴：

綿飴そのものです。

他には射的に使われた鉄砲はテッポウオやママンボウが使用されていたというふうでしょうか迷い、結局しませんでした。

次回は本編をあげたいです。

驚きの再会（前書き）

久々の本編更新です！

驚きの再会

同じ頃、ホワイトはNと一緒にリゾートデザートを歩き、古代の城に着いた。

「今まで特に変わった様子はなかったけど、この中から微妙に違和感を感じる……………」

「うん」

ホワイトは入り口で立ち止まり真剣な表情でそう言い、Nもそれに頷く。

二人は暫くその場に立っていたが、古代の城へと入っていった。

* * *

一方、レイはまだひたすら走り逃げ回っていた。

「ハア、ハア、ハア……………。全くしつこい連中だなあ……………」

彼は町の外に出ていた。辺りは砂が広がっているが、所々舗装されているのが見える。

「いたぞ！」

「あそこだ！」

「捕まえる！」

跡を追ってきた男達が岩壁に手をついていたレイを見つけて一直線に突っ込んできた。

「一体どういうことだよ……………」

レイは呆れてそう呟き、再び走り出そうとした。しかし。

「あっ！」

砂場に足を取られその場でこけてしまった。すぐに顔を上げて立ち上がろうとしたが、男達が既に近くにまで迫っていた。

「いまだー！」

一人がそう叫んで男達は一斉に襲い掛かろうとした。もうダメだ、レイはそう覚悟し目を瞑ってしまった。しかし、何時まで経っても彼には何も起こらなかった。ふと目を開け顔を上げると、彼と彼等の間にワルビアルが立っていた。そして無言のままストーンエッジを繰り出し、男達を一瞬にして倒し気絶させた。

「なっ！？」

レイは目の前の光景に驚き啞然とした。

ワルビアルはレイをその目で捉えたと体の向きを変え、少しずつ彼に近づいていった。彼は身の危険を感じ取ったがその場を動けずにいた。ワルビアルはある程度近づくと腕を振り上げ、爪を大きくして振りかざした。

「止めるんだ」

後数ミリでレイの顔に爪が当たる直前、突然現れた男の声でワルビアルは動きを止め、レイから少し離れた。代わりにその彼がレイに近づく。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……」

レイはやっと立ち上がり、服についていた砂を払い落とした。湿気が無く、砂はサラサラしていたのですぐに払い終えた。

レイはワルビアルを見ると、先程ピカチュウ達が徹底的に痛めつけていたポケモン達に似ていると感じ取った。そう、感情のない無機質で機械的のようなものであった。そしてどこかで見たとように思え、悲しい気持ちに覆われていた。

（いったい、どういうことだ？）

疑問に思い始めたレイは警戒し後ずさりした。

「……………ほう」

「……………？」

「成る程な」

「……………」

男が意味ありげに呟き、レイはさらに警戒心を強めて耳を傾けていた。そして、彼から聞いたことは意外なことであった。

「似ていると思いきや、まさか本人とはな……………」

驚きの再会（後書き）

さてと、久しぶりの本編でした。次は早めにしたいな、と考えています。

そして、この後書きにこれから次話のキーポケモンを出していきま
す。意味は簡単でポケモンの名前だけを出す次回予告みたいなもの
です。たまに意味をなさない場合もありますが……。このことに
ついて何か問題がある場合、理由も一緒にお願ひします。

では早速！

次回のキーポケモンはこれ！

↓フライゴン

仲間………？（前書き）

レイ「今回のキーポケモンはフライゴン。地面、ドラゴンタイプの精霊ポケモンと呼ばれていて、高さは2・0m、重さは82・0kgだよ。ビブラーバの進化系で、羽ばたく音が女性の美しい歌声に似ていることから砂漠の精霊と呼ばれているよ」

今回からこのようにキーポケモン、またはキーとなる技の簡単な説明を入れたいと思っています。もしかしたら、分かっていることだらけでどうでもいいと思うかもしれませんが……。

また、今回から後書きのところに次回予告を入れてみます。ただし、予告なしに内容が変更されるかもしれません。

それでは、本編をどうぞ！

仲間……………？

「似ていると思いきやまさか本人とはな……………」

「！？」

男が不気味にも不敵な笑みを浮かべてそう言うのでレイは流石に驚きを隠せずにいた。しかし、それでも黙り込んでいたもののその表情から動揺は隠せないでいた。

「知りたいようだな？」

「……………本当のことであれば、ね」

レイは相変わらず警戒したまま、しかし聞き耳をたてたままでもある。男は何か言おうと口を開くがすぐに口を閉じてまた開き、言う。

「いや、止めておくか……………」

「……………？」

「お前しか知らないものもあるからな」

「……………」

レイは男からの敵意が無くなっていくのを感じ取ると警戒心は残したままであるが深呼吸をしてその場に座り込んだ。

「僕は、お前達とは何かしらの関係があつたのか？」

「ああ、大有りさ。何せお前は俺達の組織の一員だったからな！！」

「え！？」

男は当然のように答え、レイは驚き混乱し、思考が停止寸前までいくところであつた。

（一体どこまで知っている……………？）

何とか頭を働かせようとしても混乱しているため考えられないでいた。

「記憶喪失、か……………。安心しろ、お前に被害を加える気はない」

「……………」

レイは黙り込んだままになり、彼を睨みつけるように見る。

「信じられない、か……………。ま、今じゃ当然だな」

男はワルビアルをボールに戻し、とある方向を指差した。レイもつられるようにその方向を見る。

「この先に古代の城というものがある」

「え？」

考えもしなかったことをいきなり言われて驚き、レイは再び彼を見

る。男は腕を下ろして続けて言う。

「そこにお前が求めている答えが見えるかもな……………」

そこで一旦切り、一呼吸おいて続けて言う。

「俺の名は砂巻勝也。覚えておけと言ってもそのうち思い出すかもなお前なら、黒崎レイ」

男は自分の名を言うとボールからフライゴンを出してそれに乗る。

「ま、待ってくれ！」

「……………」

レイは立ち上がって慌てたように勝也を呼び止めた。

仲間……………？（後書き）

- 次回予告 -

僕が彼を呼び止めたのはこの砂漠がおかしいと思ったからなんだ。
次回、リゾートデザートの異変。

次回のキースキルはこれ！

……………砂嵐

次回もお楽しみに！

今回はオリジナルな設定が相当入ると思います。

リゾートデザートの異変（前書き）

レイ「今回のキースキルは砂嵐。岩タイプの変化技で5ターンの間、天気を砂嵐状態にする技だね。砂嵐がおきている間は岩タイプの特防が上がり、一部の技や特性に影響を与えるね。更には地面、岩、鋼タイプ、一部の特性を持つポケモン以外にダメージを少しずつ与えていくね」

この技を初めて見たときは地面タイプの技かと思ったのは今でも覚えています。にしてもこの小説、バトルがあまりにも少なすぎる。

今回はオリジナル設定があります。

リゾートデザートの異変

「ま、待ってくれ!」

「……………」

レイはフライゴンに乗って飛び立とうとする勝也を呼び止める。

「……、本当に砂漠なのか?」

「……………ほう、気づいたか」

勝也は多少驚いた顔をしてフライゴンに乗ったままレイに視線を合わせる。

「お前、砂漠の気候というものを知っているな?」

「うん。基本的に雨が降らず、昼間は日差しが強く照りつけて空気は乾燥している。昼間は極端に暑く、夜は極端に寒くなるはずだ」

「……名答。だが、今のここはどうだ?」

「夏の昼間なのに、涼しいくらいだと思う」

レイが着ているのは長袖のジャケット。それを着ていてもあまり暑いと感じていないのが今の彼である。

「まあ、そうだろうな。ここを何というか、知ってるか?」

勝也もまたレイに頷き、更に質問をする。しかし、彼は首を横に振った。

「ここはリゾートデザートという。最も、観光地ならともかく避暑地としては涼しいが砂嵐が強く吹くがな」

「今は吹いてないけど？」

「そのうちくるだろうよ、ずっとここにいりゃな」

勝也の言う通り、普段はここには砂嵐が強く舞っている。しかし、今は風が吹いていなかった。

「ここが何故リゾートデザートと呼ばれているのかは、昔は今のように避暑地と言っていたいい温度だったのだろう。だがあるとき、何らかの影響でここが他の砂漠と変わらない気候になった。その後、三年前までずっとその気候が続いていたがそのときにこの地方で大きな事件がおきた。それが白と黒の龍、幼き少女と少年の英雄事件だ。二人は戦い、結果的に白の少女が勝った。その後、少年のほうは行方不明となり、少女のほうもその彼を探すことにした。丁度その戦いが終わったときだ、ここが今の気候に急激に変化したのは。これがその英雄事件の影響かこの星の自然のサイクルかは分からないが、観光地として有名なのは今も昔も変わらないようだがな。まあ、どういうことか生態系には影響がないようだけどな」

勝也が最後の台詞を興味なさげに言うとフライゴンが少し羽ばいた。

「俺達には関係ないことなのかもな、ポケモンがどのような場所に

でも生きていられるのならば……」

彼はそう言い残し、フライゴンは飛び去って行き、姿は見えなくなつた。

「……………本当に、それだけでいいんだろうか？」

一人残されたレイは彼が最後に残した台詞に違和感を覚えながら空を見上げて消え入るように呟いた。

リゾートデザートの異変（後書き）

次回予告。

古代の城に着いたレイ。その入り口で彼はヒヒダルマの大群を目撃する。

次回、大群の襲撃！ VS ヒヒダルマ！

次回のキーポケモンはこれ！

…… ヒヒダルマ

今回は久しぶりにバトルになりそうです。しかし、かなりむちゃくちゃなバトルです。

大群の襲撃！ VS ヒヒダルマ！（前書き）

レイ「今回のキーポケモンは炎上ポケモンのヒヒダルマ。高さ1.3m、重さ92.9kgの炎タイプだよ。特性には力ずくとダルマモードがあつて、ダルマモードになると炎、エスパータイプに変化するね」

それでも特性は力ずくのほうが使え勝手はいい気がします。そして意外なことにそれなりに素早さが高く防御や特防が低いことに吃驚！ 攻撃が高いことは分かっていたんですが、見た目とは裏腹の能力値なんですね。あれ、こう思ったのは私だけですか？

大群の襲撃！ VS ヒヒダルマ！

「ここが、古代の城か」

レイは勝也と別れた後、リゾートデザートを歩き、古代の城の入り口に辿り着いた。そこは、何かしらの建物が砂に埋まり、その周りには十数個の石像が並んでいる少し殺風景な場所であった。

「…お腹すいた」

レイはそう言うなりバックの中を漁り、一口サイズの饅頭を取り出して半分程飲み込んだ。

「……っ！」

レイは突如、何らかの殺気を感じとり、辺りを見渡す。すると、周りにある石像全てが段々と赤みを帯び、次第にあるポケモンへと変化した。

「ひ、ヒヒダルマの群れ！？」

軽く十匹は越えるであろうその数にレイは驚く。そして彼等はそのままレイに襲いかかった。レイは若干焦りつつ、その襲撃を避けていき、残りの饅頭を飲み込んだ。

「一体どうしたことだよ！？」

驚きと焦りが混じる中、レイはピカチュウを出す。彼女もまた驚き

の色を出す、すぐに戦闘体勢に入る。

ヒダルマ3匹が拳に炎を纏い、炎のパンチでピカチュウに殴りかかるうとするが、彼女はジャンプしてそれをかわして尾に力を込めて硬くさせ、アイアンテールを振り下ろしてその3匹を薙ぎ倒した。その後、ピカチュウは空中で体勢を立て直して次に襲いかかってきた5匹に尾で作った球体のエネルギー弾、エレキボールで打ち落とした。しかし、彼女のすぐ傍にまで来ていた一匹がアームハンマーを振り下ろして、そのまま重力を利用して地面に叩きつけた。砂煙が舞い、ヒダルマはすぐにジャンプでその場を離れる。

「ピカチュウ！」

レイは心配してピカチュウに声をかけるが幸いにもすぐに立ち上がり、砂煙が晴れていった。

（この砂が柔らかくクッションの役割をしてダメージを軽減したのか……）

レイはそう考えながら砂を払うように足を動かしてピカチュウとヒダルマを見る。

「電磁浮遊！」

ヒダルマが頭から突っ込む体勢に入ったのを見るとレイは指示を出す。ピカチュウもそれに従い、ジャンプしてヒダルマの頭突きをかわし、重力に逆らうように体を浮かせた。そのときの頭突きが地面にぶつかり、そのときのエネルギーが大きかったのか多少揺れはしたものの他のヒダルマやレイが少しバランスを崩すだけであった。しかし、ピカチュウはその隙を見逃さず、ヒダルマ全員に

強烈な電撃、十万ボルトを浴びせた。倒れるものが多数いたものの、中にはまだ立ち上がろうとするものもいた。

「ボルテッカー!!」

レイの指示にピカチュウは一声あげて頷き、大量の電気を身に纏う。その量は凄まじくピカチュウが霞んで見えなくなる程であった。そしてそのまま群れに突進していった。これを受けて立ち上がるヒビダルマはいなく、全員が戦闘不能となっていた。ピカチュウはそれを確認すると身に纏っていた電気を解除してレイの胸元に飛びついた。

「お疲れ様、ピカチュウ……………」

飛びついてきた彼女にレイは頭を撫でながらそう言う。ピカチュウも嬉しそうに目を細めてレイに頬擦りをして甘えていた。

大群の襲撃！ VS ヒヒダルマ！（後書き）

次回予告

古代の城に入ったレイはある問題に突入。それは、構造が分からず迷子になってしまふということだった。

次回、ゴメンナサイ。

次回のキーポケモンはこれ！

……ピカチュウ

さて、もの凄く久々のバトルシーン。にしてもバトルをしたのってまだ数えるくらいしかない？ そしてピカチュウは無双していた気がします。

ゴメンナサイ（前書き）

レイ「今回のキーポケモンはピカチュウ。静電気の特徴を持つ電気タイプの鼠ポケモンだよ。高さは40cm、重さは6.0kgという小さくて可愛いポケモンだね。警戒心が高く頭もいいポケモンみたいだよ。ところでピカチュウ、こんな黒焦げになったんじゃあこの木の実が食えないんだけど……」

でも怒っているわけではないレイです。アニメでもお馴染みの主人公ポケモン。ポケスぺでもレッドやイエローが使っていた主力級のポケモンですね。他にも色々なポケモンの漫画にも出ていますね。ポケモンの中でも最も有名なものの一種だと思っています。

さて、突然なんですが諸事情により次回予告等は一度休止します。申し訳ございません。

では、本編どうぞ。

ゴメンナサイ

「…フウ」

レイは暫く突っ立っていたが、すぐに溜め息をついてその場に力が抜けたように座り込んだ。

「何か凄く怖かったし疲れたんだけど……」

レイは気が抜けていき、両手を地面につけて深く息を吐く。ピカチュウも彼の言っていることに同意するように頷いていた。

「にしても何で急に襲ってきたんだろ？」

総勢10匹以上のヒダルマ。ピカチュウが戦っている間は彼女への指示と状況把握で頭がいっぱいになったレイだが、こうやって戦いが終わるとその疑問にぶつかった。余程気になるのかその場で考え出すレイだが、そんなこと勿論分かるはずがない。それを見かねたピカチュウはレイのバックの中に入り、漁るとある一つの袋を取り出した。

「怒り饅頭？ でも何でまたそんなものに……」

謎は深まるばかり。余計に考えるレイを諦めなさいと諭すようにピカチュウは彼の肩を叩く。

「…仕方ないか」

レイはそう言ってピカチュウからその袋を取り、それを一番近くにいたヒビダルマに握らせる。そしてピカチュウをボールに戻して遺跡の入り口まで移動し、そして振り返った。

「……ごめんなさい」

レイは消え入るようにそう呟いて、遺跡へと足を踏み入れた。

暫くの後、この場一帯からヒビダルマの姿は消え、レイが来たときの風景に戻っていた。

* * *

「どついう造りになってるんだ、これ？」

レイは遺跡の中で座り込んでいた。中は意外と広く、彼はそう、迷ってしまったのだ。

「あー、どうしょ？」

レイは誰かに向かつてではなく天井を見上げて言う。そこから砂が重力に沿ってパラパラと降り注いでいた。

この古代の石城は意外と頑丈な造りになっているらしく、崩れていくところは少なかった。その崩れているところには穴が空いていてそこから砂がゆっくりと降り注いでいた。

「ま、休んでいても仕方ない。先進も」

レイはそう言って立ち上がって歩き出したが暫くして、

「……うう、どい？」

更に迷ってしまったようだ。

彼はここに来たのは勿論初めての上、ここに来るまで適当に歩いただけであった。更に悪いことにここに来るまで人に会っていないので道も聞けない。見たのは野生ポケモンだけである。

「……こうなったらやけくそだ！ とことん深いところまで突き進んでやる！！」

もう自暴自棄になったのかレイは大声で叫んだ。周りにいたワルビルやデスカーン達は突然のことに驚きびくつく。が、レイにはそんなことは見えていなかった。

水の導き（前書き）

すごくお久しぶりです。暫くの間、投稿できずにいました。無断でいたことにお詫び申しあげます。とは言っても、この小説を楽しみにしてくれている人がいるのかは疑問な所ですが…。

水の導き

「あれ…？」

古代の城の中であちこちをさ迷っていたレイはある一つの石室にやってきた。彼はその壁を少し叩く。

「床に砂が無い。それに、この辺りから壁がかなり頑丈な造りになってきてる」

彼はそう言っただけで少し見渡すとまた前に進んでいった。そして少し進むと今度は奇妙な光景を目にした。

「…これは？」

そこにいたのはフードを被った二人の男とミルホッグやレパルダスが倒れているというものだった。レイが彼等の状態を確認しようと近づこうとして歩を進ませたとき、何かを踏んだことに気づいた。

（…水？）

辺りを確認してみると所々少し濡れている。

（誰かと戦ったのか？ にしてもこの二人もポケモン達もそこまで傷が無い。それに、気絶してるだけだ……）

レイは彼等に近づいて状態を確認し、立ち上がる。

「兎に角、先に進んでみるか……」

レイはそう呟き、別の部屋へと進んでいった。

しかし、どれだけ先に進んでいってもどの部屋にも同じような光景が見えるだけだった。

「どうなっているんだ？ どの部屋にいても何人かの同じ服装の人達やポケモン達が倒れているだけだなんて……」

レイは多少焦ったように言う。それでも何とか気を落ち着かせようとレイはその場で少し休もうとした。そのとき、爆発音が聞こえ、その場が一瞬だが揺れた。

「……！ 何だ、今の寒気は！？」

思わず大声を上げるレイ。彼はそのまま辺りを見渡す。

「何だったんだ、今は……。それにさっき感じた寒気、それと妙に体が反応するこの異常な力は……。何だ？」

立ち上がったレイはその部屋を後にした。

* * *

「恐らく、この辺りだと思ったんだけど……」

ある程度進んだレイはある部屋で立ち止まった。そこで再び爆発音が聞こえた。

「…隣か！」

レイは隣の部屋の入り口の壁際に密着する。

（……何か言い争ってるな。一人は老人、一人は青年、か？ だ
ど、煙が酷くて状況が確認しづらいし、言っていることも聞きづら
い）

レイはどうしようか迷っているときだった。彼の耳に聞き覚えのあ
る声のはっきりと聞こえた。

「いい加減にしないよ、またそんなことを繰り返したいの!!」

（え、ホワイト？ まさか、彼女もこれに関係してるのか!？）

変化の兆し

（彼女がここにいるなんて……。どういうことだ？ それに、この部屋から異常な力を感じる……。そして何だ？ この妙な違和感は……）

レイは壁際で隣の部屋の様子を伺っていた。

（くそっ！ 煙の舞が酷くて状況が確認出来ない。かといって、部屋に入るにはかなり危険だし……）

レイは部屋を確認しながら、中に何がいるのかを確認していった。

（レシラムにゼクロム、キュレム。何でこの3体がここに？ それに対峙するようにいるウルガモスも何かおかしい。そして、ホワイと男性のポケモン達は体力をかなり消耗してるのに対し、老人のほうはそういったところが見えない。どうなっている？）

煙もだいぶ晴れてきたのか、レイは状況を改めて確認する。戦況はホワイト達の不利であろう、と彼は考えていた。そして、煙が完全に晴れきった頃、老人の声が響く。

「ほう、どうやらネズミが一匹迷い込んだようだな」

「え？」

「誰……？」

（気づかれた！？）

レイは内心で焦る。ホワイトと青年はその部屋の唯一の入り口を見る。が、何も起こらず、再び老人のほうを向く。

「何もないじゃない！」

ホワイトがそう大声で言う。老人は不敵に笑った。

「隠れていないで出てきたどうだ？ そこにいるのは分かっているんだ」

老人は再び誰もいないはずの入り口に向かって言う。その壁際にいるレイは一息つく。と漸くその部屋に入った。

「……！？」

レイは部屋に入った途端、目を見開く。そしてウルガモスと老人を何度か見る。

「レイ、どうしてここに……？」

レイが現れたことによつて、ホワイトと青年は驚く。しかし、レイは黙り込んだままだった。

「ホワイト、彼は誰なんだい？」

「N……。彼はレイ。とある理由で私と一緒にいるトレーナーよ」

青年、Nが尋ね、ホワイトはそれに答える。しかし、二人は何故彼

がここに来たのかが分からなかった。

（この部屋に入ってはつきりと分かった。あの老人から発せられる力がウルガモスと共鳴して異常なまでに大きくなっている。しかし、何故だ？ この力に体が反応してる……）

レイは自分の手足や体のあちこちを見回す。そして、自分の体に起きている異変を探っていた。

「貴方はレイと言うのですか。初めまして、私はゲーチスと言います」

老人、ゲーチスに声をかけられ、レイは探ることを止める。

「ところで、何故貴方は此方へ？」

「……ある人や水の導きによって、ところかな？」

レイはそう言ってホワイト達のほうを向く。よく見ると彼女達も所々ボロボロである。

「レイ、気をつけて！ 理屈は分かんないけどそのポケモンにダメージが与えられないのよ！！」

（ダメージが与えられない……？）

レイは気になりもう一度戦況を見る。

「よく分かっているではないか。では始末にかかるとしよう。デスカーン、まずは今来た少年をやってしまえ！」

ゲーチスの指示を聞き、デスカーンはレイに向かっていった。

「そ、そんな……！」

「レイ、逃げて……！」

太陽の加護と月光の加護

「レイ、逃げて!!」

「!!」

デスカーンはゲーチスの指示を受けレイに突撃する。然し、レイはそれに動じることなくボールを投げた。

「ピカチュウ、アイアンテールで迎え撃て!」

そこから出てきたピカチュウはすぐに尾を硬質化させてデスカーンに叩きつけた。そして、壁まで吹っ飛んでいった。

「え……?」

「何!?!」

「嘘……」

レイ以外の三人は驚きの声をあげる。彼等はピカチュウが負けると思っただろう。だが、実際はどうだろうか。現にデスカーンはピカチュウのパワーに押し返されて戦闘不能となっていた。

「貴様……、何をした!?!」

ゲーチスの声と表情に焦りが見える。それもその筈だ。こちらには一切通じないと思われた攻撃が効いたのだから。然し、当の本人も

何事か分かっていないようだ。

「ちい。サザンドラ、龍の波導で狙い撃て！」

サザンドラは即座に青いエネルギーを口に溜め、それを白い螺旋状にして放つ。然し、それが発射された頃にはピカチュウはそこにはおらず、既にサザンドラに飛びついていた。

「何だと!？」

ゲーチスは驚くがそれに気づくのは遅かった。時間を置かずピカチュウは既に強力な10万ボルトを放った。それを避けられる筈もなかったサザンドラはその直撃を受けて呻き声をあげていた。

「まただ……」

その様子をずっと見ていたホワイトは小さく呟いた。

「また、て……、何がだい？」

それを聞いたNが彼女に訊く。

「以前にもあった。レイのポケモンが彼の指示無く動き、攻撃したのよ……」

「言われてみれば……確かそうだ！」

ホワイトの疑問。それにNも同意する。

（黒崎レイ。……貴方は一体何者なの？）

ホワイトは更に疑問を募らせていった。

ある程度経つと電撃の猛攻が止んだ。

「ピカチュウ、瓦割りだ！」

彼女は即座にサザンドラから離れ、尾に力を込めて彼に叩きつけた。サザンドラが壁に叩きつけられ、床に落ちるのと同時にピカチュウも床に降りた。

「貴様、まさか月光の加護を持っているのか!？」

「月光の、加護？」

ゲーチスは更に焦り、レイにあることを聞いた。当然、レイは何のことか分かっていない。

「何、それ？」

「聞いたことがあるよ」

「N？」

ホワイトも分からないようにゲーチスに訊くが、Nには聞き覚えがあったようだ。

「太陽の加護と月光の加護。どちらもダメージを受けた瞬間に体力を回復させていく特殊能力だ。その力を打ち消すにはそれぞれの逆の力、太陽なら月光をぶつけて消すことが出来るんだ」

「でも、レイは今までそんな力を使ってなかったような……？」

「多分、それは彼の持つ力が余りにも強いからだと思う。この力は余りに強いと力自体が勝手に制御を行って相手が持っているか否かによって使われる、と聞いたことがある（それに、僕の予想だけど彼は太陽と月光の両方の力を持っている）」

Nはそこで一旦切って話を進めた。

「でも、僕にとっては父さん、いや、ゲーチスのほうが疑問だ。何故そんな力をもっている！？」

「フン、当然のことか。私のこの力はある人物の治療によって授かったものだ」

「その人物は一体誰！？」

「残念ながらそれは言えんな。この力はまだ小さいほつだがそれでも十分だ。お前達二人を仕留めるくらいはな！！」

「く！！」

「まずい！！」

ホワイトとNはすぐに別のポケモンを出す準備をする。然し、レイはその中でも至って冷静だった。

（成程ね。幾ら紛い物で小さな力だったとしてもそれに対する力を持つていない二人を仕留めるのは十分。さらに太陽ポケモン、

ウルガモスがいるから太陽の加護はさらに力を増した、ということか……)

そして、彼の口元が微かにだが笑ったように見えた。

太陽の加護と月光の加護（後書き）

……何か変なものを出してしまった。後悔も反省もしていませんが……。まあ、後々重要になるので覚えておいて下さい。

響け、輪唱！ 勝利に導け！！

「ホワイト、一つ相談があるんだけど……」

「レイ……、何？」

レイは彼女達に近づきながらホワイトに声をかける。

「あのウルガモスをどうにかしてこの場から消すことは出来ない？」

「け、消す！？ あのウルガモスを？ この部屋から出すにしてもあの入り口じゃ狭いし、こんな所をぶつ壊すのも時間かかるし、もし壊せたとしても全体が崩れるかもしれないし……」

「ああもう！ ホワイト、落ち着いて！！ 第一、ここ崩したら色々問題になるよ！」

レイの突然の提案にホワイトは慌てふためく。それをNは何とか宥めていた。

「モンスターボールで捕まえることが出来れば！ 幸い、あのウルガモスはまだ野生だし」

「でも、その問題はいいつをどうやって弱らせるかよ？ 私のレシラムとゼクロム、貴方のキュレムが力を合わせてもダメージを与えられないのよ？」

「いや、その必要は無いと思う」

Nの提案は最もだ。然し、今まで彼等の持つ伝説と称されるポケモンでさえもウルガモスにダメージが与えられていない。それをレイはあるものを取り出して必要ないと言った。当然二人はえっ、という顔で彼を見る。レイはそれをホワイトに渡しながら言う。

「これを使えば一々ダメージを与えずとも捕まえられると思うよ？」

「これって……マスターボール!？」

彼が渡したのは上半分が紫色で前の部分に少し大きめにMとイニシャルの入ったボールだった。

「り、理論上はそうだけど何で貴方はこれを持つてるの？」

「知らん。君に助けてもらったときには既にあった。ただそれだけだ」

レイはそう答えるしかない。何故なら、彼は記憶喪失なのだから。

（あいつが相当苦しんでるように見える、何てこいつらに言えないもんな……）

彼は密かにそう思っていた。

「と、兎に角、僕達で何とかしてみようよ。キュレム、あいつに隙を作って！ 凍える世界！」

「そうね。レシラム、青い炎！ ゼクロム、雷撃！」

Nとホワイトはそれぞれ自分のポケモンに指示を出していく。

「無駄だということが分らんか！ キリキザン、ガマゲロゲ、シビルドン、行け！」

ゲーチスも負けじと次のポケモンを出していく。

「ピカチュウ、キリキザンの相手を頼む！」

彼がポケモンを出したことに気づいたレイは足下にいたピカチュウに指示を出す。彼女は頷いて物凄い速さで彼等に向かった。そしてレイは他の2匹も出す。

「グレイシアはガマゲロゲを、リーフィアはシビルドンを頼む！」

それぞれボールから出てきた彼女達はレイの指示通りに向かっていく。

「ちい。キリキザンは辻斬り！ ガマゲロゲは泥爆弾！ シビルドンはワイルドボルト！」

ゲーチスはそれぞれに指示を出す。然し、ピカチュウ達はそれらを難なくかわし、ピカチュウは電撃波を、グレイシアは氷の息吹を、リーフィアはマジカルリーフを当てた。彼等が戦っている隙にレイはゲーチスに近づいていった。そしてある程度近づくとも立ち止まる。

（この人、どこかで会ったことがある？）

レイはそんな疑問を持っていた。

「お前、何者だ？」

「え！？」

「何者だときいている！」

ゲーチスは自分のポケモン達に指示を出しながらもレイに疑問をぶつける。少し間を置いて彼はこう答えた。

「黒崎レイ。記憶を失った、普通のトレーナーだよ？」

（黒崎……だと！？）

彼の名前を聞いたゲーチスは驚いた表情になる。それと同時に途端に膝をついた。

「な……、ウルガモスが捕まえられただと……？」

彼はウルガモスが戦っていた場所を見る。そこには既に彼はいなかった。これを好機だと見たレイは

「輪唱！」

と、大声で言った。その直後、ピカチュウが歌を歌うような声をその部屋に響かせた。それに続くようにグレイシア、そしてリーフィアが追いかけるように似たような声を響かせる。それがあちこちに反響してホワイト達は悲鳴をあげて耳を塞いでいた。30秒程したところでそれが止んだ。

「ぐう……、な！？」

何とか回復したゲーチスは自分のポケモンが戦闘不能になっているのが見えた。

「貴方の最後のポケモンのボールの開閉スイッチも破壊しました」

「何っ!？」

先程の輪唱のときにゲーチスの背後に移動していたのか、レイの声が聞こえ彼は最後のボールを確認する。それは足下に彼の足下にある、レイの言う通り開閉スイッチが破壊されていた。

「ウルガモスがいらない以上、貴方の太陽の加護も元の大きさに衰退するでしょう。……貴方の負けです」

レイはただ静かにそう言った。

三年越しの決着

その後、ゲーチスは国際警察に連れていかれた。

「これで、七賢人がみんな捕まったか……」

遺跡から出てきたホワイトは空を見上げて言う。日は傾き始め、空はほんのり赤く色づいていた。

「にしてもよかったのかい？ 僕をほつといて」

「うん。それに、貴方と話したいことがあったから」

「そっか。と言っても、僕もなんだけどね」

二人は向き合って話していく。

（僕って邪魔者だよね……、多分）

その様子を見ていたレイは声には出さずともそう思っていた。

「強くなったね、ホワイト」

「そりゃ、三年もあれば……。Nだって十分強くなったじゃない」

「フフッ、ありがとう。でも、君のほうこそレシラムだけじゃなく、ゼクロムも扱えてるじゃないか！ 君に託して正解だったよ」

「そ、そんなことないよ……」

互いに誉め合い、ホワイトは顔を赤くして照れていた。

「君達を見ていて、安心したよ」

「え？」

「君、達？」

Nは笑ってそう言い、ホワイトとレイはポカンとしていた。

「君の隣にいるのは、もう僕じゃないんだよね……」

「どうゆっ、こと？」

Nが小さく呟くとそれが聞こえたのか、ホワイトは聞き返す。然し、彼はそれには答えず、歩き出した。

「ま、待つてよ、N！」

「受け取れ、ホワイト」

彼女もそれを追いかけようとするが、Nが何かを投げ、それを受け取ることで足止めされてしまう。それはボールだった。

「キュレムのことを頼んだよ、ホワイト。……さようならだ！」

Nが明るくそう言うと突如としてその場に強い砂嵐が巻き起こった。彼等は咄嗟に腕で顔を隠す。少しのことではあったが、それが晴れ

るところには既にNはいなかった。

「……N」

彼から渡されたキュレムの入ったボールを見ながらホワイトは静かに言う。

「ホワイト……、大丈夫？」

ホワイトは振り返る。そこには心配そうな表情で彼女を見るレイの姿があった。彼女は彼を見て急に抱きつき、声をあげて泣いた。突然のことで驚いたレイだったが、彼女を無言でしっかりと抱きしめた。

三年越しの決着（後書き）

さて、これで第三章は終わりです。少し長かった気がします。

後、出来れば感想がはつきり言って全くと言っていいほど無いので、アドバイスでもいいのでお願いします。

再開へ

「ん……、朝か」

ポケモンセンターの一室で一夜を明かしたレイはベッドから起き上がる。まだ眠いのか、目を少し擦る。

「ホワイトは……？」

目をはつきりさせ、隣のベッドを見るがそこには誰もいない。

「どこ行っただろう？」

ベッドから降り、普段着に着替えていつも着ている黒の長めのコートを着て部屋を出た。

* * *

昨日、泣き疲れてその場で眠ってしまったホワイトをレイはポケモンセンターに連れてきてそのまま宿をとった。そしてそのまま彼女をベッドの上に寝かせつけた。そして彼も暫くした後、彼も寝付いた。

「フウ……」

目を覚ましたレイは部屋を出てホワイトを探していた。が、それもすぐに終わった。

「レイ、何してんの？」

「あ……」

後ろからの声にレイは振り返る。そこには風呂から上がったばかりなのか、普段着ではあるが帽子は被らず、長い髪は少し濡れたまま結んでいないホワイトがいた。

「いや、君のことを探そうとしていたんだけど……」

レイはホワイトの問いに素直に答える。

「そっか。じゃあ少し待って。髪を乾かして結んでくるから」

そう言っただけでホワイトは部屋に入ってしまった。

* * *

「昨日はゴメンね。迷惑かけちゃって」

「ん。いや、全然」

「そお？」

10分程した後、部屋から出たホワイトと一緒に朝食をとるため食堂に向かっていた。そこで彼等は一旦ロビーに出た。

「ホワイトオー！」

「え！？」

「ん？」

ホワイトの名を呼ぶ声がして彼等は立ち止まって声のしたほうに向く。

「ホワイトー!!」

彼女の名をまた叫びながらこちらに突進してくる少女が彼等の目に映った。

「え？ え、ええ!？」

それを見たレイは驚き狼狽える。ホワイトは少し呆れていた。

「レイ、右にズレて……」

「え、あ、うん」

ホワイトはそのままレイに指示して自分も同じくズレる。

そしてその少女は勢いが止まらず近くの壁に激突した。

ホワイトは溜め息をついて彼女に挨拶をして名前を呼んだ。

「久しぶりね……」

白二つと櫟と零

「久しぶりね……、ベル」

溜め息ついて苦笑しながらも目の前に倒れている少女の名をホワイトは言う。その少女は急に立ち上がりホワイトに駆け寄る。

「久しぶり、ホワイト！ 元気にしてたー？」

「そっちも元気そうで何よりだね。直接会つのは三年ぶり、というところかしらね」

「そっか、もうそんなに経つんだね……」

久しぶりに再開した二人はたわい無い会話をする。

その様子を少し離れたところで見ていたレイは啞然としていた。

「久しぶりね、ホワイト」

「あ、アララギ博士。お久しぶりです！」

（今度は誰！？ このお姉さん！）

突如として彼の隣に現れた20代半ば、後半程度の女性にレイは驚く。見ていれば彼女もまたホワイト達とともに会話していた。

「あゝ、ホワイト？ 僕、先に食堂に行つてご飯食べてるよ？」

「え、あ、レイ！？ ちょっと待って！」

どこか言いにくそうにそう告げたレイは食堂に向かうが、ホワイ
トもそれを追いかける。

「じゃあ私達、朝食とってきますので」

一旦振り返ってベル達にそう言うとホワイトは再びレイを追いか
ける。

「朝食？ だったら、私達も一緒にいい？」

「うん、いいよ！」

「エ……？」

その会話を聞いていたレイは冷や汗を垂らしていた。

* * *

（やっぱり断るべきだったんだ……）

彼等は現在いるのは食堂。既に注文を済ませ、料理がくるのを待つ
ていた。そして待っている間、女性3人は楽しそうに会話していた。

「それでね、そのときのチェレンがね……」

「……うそっ！ そんなことやったの、あいつ！」

「でもこれはまだ序の口で……」

そう女性達だけは、だ。レイはそんな彼等を見ながら黙って料理がくるのを待っていた。正直、彼にとってその空気は居心地が悪いこと、この上ない。

（ま、いつか。久々に会えて楽しそうだし）

内心、そう考えながらも居心地の悪さは拭い切れないレイだった。

暫くして彼等の料理が並んでそれを15分程度経つと既にみんな食べ終わっていた。

「ホワイトって見ない内に大きくなったよね」

「ん、ああ。そりゃあ、三年も経てば。成長期だしね」

食べ終わった頃、ベルはホワイトにそう言う。然し、次に言ったことがちよつとした騒動になるだなんてここにいる誰が予想しただろうか。

「でもさ、肝心なところは大きくないよね？」

「え！？」

「うん。胸はまだちい……………ぎゃん！？」

ポコッ、と、鈍い音がしてベルの顔が机に激突する。驚いたレイが隣を見ると席を立てて顔を赤面させながらも拳を構えるホワイトがいた。

「う、煩い！ この相変わらずの童顔ロリ巨乳！ 女はみんな貴女みたいに胸がデカい人ばかりじゃないのよ！！ それに、貧乳はステータスだ！ 稀少価値なんだってばあ！！」

「うう。でも、あたしからしたら貴女のように背が高いほうがよっぽどうら……ギャフツ！？」

「煩い、このバカ！」

またベルに鈍い音が鳴る。

それを見ていたレイは狼狽えながらもまだベルを殴ろうとしているホワイトを宥めようとした。

「や、止めてホワイト！ ベルのライフはもうゼロだよ！！」

「レイは黙ってて！！」

「は、はい！！」

が、逆に一喝されて出来なかった。

（所で、何故ホワイトは怒ってるの？ それに、言っている意味がよく分らないんだけど……）

レイは怯えながらもそんなことを考えていた。

アララギ博士はそんな彼等を温かい目で見ていた。

結局、その騒動は10分程続いていた。

白二つと櫟と零（後書き）

後半のやつ、大丈夫なのだろうか……？

もしダメであれば書き直そうと思います。

3対3！ 幼なじみ対決！（前書き）

新年あけましておめでとうございます！ 今年も私とこの小説をよろしく願います。今年の目標は小説の完結を目指すことです。

さて、新年の挨拶もそこに本編をどうぞ！

3対3！ 幼なじみ対決！

「どうしてこうなった……」

レイは現在、ベンチに座っている。そして目の前にはバトルフィールドがある。彼の隣にはアララギ博士が座っており、バトルフィールドの右サイドにはホワイトが、左サイドにはベルが立っている。

彼等がどうしてここにいいのかというと、朝食が終わり少し時間が経った後、ベルがホワイトに久しぶりにバトルしよう、と誘ったからだ。ホワイトはそれにのり、レイを（強制的に）連れてきて見学させようとしていた。そして現在に至る。

因みに、アララギ達がここに来た理由は昨日起きた事件でウルガモスが目覚めてリゾートデザート帯に生態系に悪影響が出ないかの調査、ということだ。ベルはそれの手伝いで来ている。

「さーて、久々のホワイトとのバトル！ 今度こそ勝つよ！」

「三年ぶりね、貴女と戦うのも。でも、私はその三年間を遊んで旅してた訳じゃない！ 負けないわよ！」

お互いにバトルの準備が整ったのか、構えをとる。

（どうやら、朝食の騒ぎは気にしてないよう？）

そんな彼女達のやり取りを見てそう思うレイ。然し、ホワイトが何故あのとき取り乱したのか、未だ理由が分からないレイだった。

「じゃあいくよ！ ムーランド！」

「頼むよ、ランクルス！」

二人ともボールからそれぞれのポケモンを出す。ベルはムーランド、ホワイトはランクルスだ。

「！！！」

彼等が出て来た直後、正確にはランクルスを見た直後、レイは体の何かが反応した。

（何だ、今は……）

何も分からない彼にとっては恐怖でしかないことだ。その違和感の正体に気づく訳もない。

（……兎に角、目の前のバトルを観戦しますか）

レイは深く考えないことにした。

「ムーランド、シャドーボール！」

「ランクルス、エナジーボール！」

それぞれが紫色の球体エネルギーと緑色の球体エネルギーを発射し、ぶつけ合って爆発する。

「突っ込んでムーランド、突進！」

「雷で迎え撃つて！」

ムーランドは指示の通りに勢いよくランクルスに突っ込む。然し、それは叶わず、ランクルスによって放たれた強烈な電撃に直撃して吹っ飛ばされた。

「ムーランド！ 大丈夫！？」

地面に叩きつけられたムーランドに心配して声をかけるベルだが、ムーランドはすぐに立ち上がって頷いた。

「よし、シャドーボール！」

「ランクルス、気合い玉！」

再び発射される球体エネルギー。今度はお互いの技にはぶつからず、それぞれに直撃する。

「あわわ……」

「自己再生！」

慌てふためくベルと冷静に指示を出すホワイト。ムーランドは咳き込むがランクルスは回復に専念した。

「今よ、サイコキネシス！」

回復も終わり、未だ咳き込むムーランドに向けて強い念波を放つランクルス。避けられないその攻撃を受けてムーランドは戦闘不能となった。

「ごめんね、ムーランド。あたしがすっかりしなかったばかりに……」

倒れたムーランドに戻し、そう誤るベル。そして彼女は別のボールを取った。

「お疲れ様、ランクルス」

ホワイトもランクルスをボールに戻し、労りの言葉をかけて別のボールを手取る。

「次はこの子だ！ ムシャーナ、頼んだよ！」

「こっちはこのこよ。行け、ドレディア！」

次のポケモンをお互いに出してバトルが再開される。

「催眠術よ！」

「そうくると思った！ ドレディア、神秘の守り！」

ムシャーナは普段は開かない目から特殊な念波を出す、ドレディアは少し変わった色のバリアを纏い、それを防いだ。

「相変わらずやるね、ホワイト！ 随分成長したように思えるよ！」

「そっちこそ！ 今度はこっちからいかせてもらっわ！ ドレディア、花びらの舞！」

「ムシャーナ、光の壁！」

お互いを誉め合い、次の攻防に移る。ドレディアは大量の花びらで攻撃するが、ムシャーナは黄色に近い壁で前後左右上下を覆い、その攻撃を防いでいた。

トレーナー同士はこのバトルを楽しんでいるのが、彼女達の表情で分かる。このバトルはまだ、始まったばかりだ。

3対3！ 幼なじみ対決！（後書き）

いきなりバトルにしようかどうか迷ったが、結局バトルにしました。
決着は次回の予定です。

では、感想をよろしくお願いします。

決着！ 幼なじみ対決！！

現在のフィールドはベルのムシャーナとホワイトのドレディアがいる。状況はドレディアが大量の花片でムシャーナを攻撃し続けた。ムシャーナはその攻撃を光の壁や守るを使い耐えていた。ダメージは少ないようだ。然し、攻撃のタイミングが彼女達には見えていなかった。

（マズい。このままじゃ攻め続けられるだけ……）

ベルは分かっていた。ホワイト相手に防御に回ってしまうと攻めに行くのが難しい、と。

「防御だけじゃ勝てないわよ！ ドレディア、痺れ粉！」

さらに、花片の舞の連続攻撃の疲れによる混乱も彼女の特性、マイペースによっておきない。更にそこから黄色の粉が降りかかってくる。

「神秘の守りで防いで！」

ベルの指示によりムシャーナは不思議なバリアが張られ、粉はかからなかった。然し、ホワイトはそれを見越していたようでニヤリと笑い次の指示を出した。

「日本晴れ！」

ドレディアがまばゆい光を放つと日差しが強くなり、更に暑くなっ

た。

「あ、暑い……」

季節は夏。ただでさえ暑い季節だ。更に温度が上がるとベルの顔には一気に汗を吹き出していた。服を首下でパタパタと仰いでいる。ホワイトも汗をかいているのが見えるが暑そうな素振りを見せない。レイに至っては平然としている。

「ソーラービーム！」

そしてドレディアは素早く太陽光をその身に溜め、そのエネルギーをムシャーナに打ち込み、煙が消えるとムシャーナが戦闘不能になっているのが見えた。

「ご苦労様、ムシャーナ」

「お疲れ様、ドレディア」

それぞれ労りの言葉をかけ、彼女達はポケモンをボールに戻した。

「確かに強くなっているわね……」

「ホワイト……？」

ホワイトは次のボールを手にとってベルに言う。

「でも、これで終わりではないでしょう？」

「ホワイト……うん！」

ベルも少し元気出たのか別のボールを手にとる。そして二人はポケモンをフィールドに出した。

「エンブオー、頼むよ!」

「フフツ、シビルドン、頼んだよ!」

ベルはエンブオー、ホワイトはシビルドンを出す。

「フレアドライブ!」

「火炎放射!」

エンブオーは炎を身に纏い突進し、シビルドンは口から吐いた炎をエンブオーに向けた。エンブオーの勢いは止まり、炎も消える。

「電磁砲!」

そしてシビルドンは口から高圧縮高密度の電気球を発射し、それがエンブオーに直撃した。

「まだまだ! プラストバーン!」

体勢を崩しながらもエンブオーは周囲を爆発させてシビルドンはそれに飲み込まれていった。

「シビルドン!?!」

ホワイトは声をかけるが、煙が晴れたときには両者共に既に戦闘不

能
だ
っ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6632t/>

降り積もる梅雨

2012年1月11日16時00分発行